

## 在外研究雑感

大西 晴樹

私の在外研究もすでに2年目に入り、帰国の日が次第に近づいてきました。「ピューリタン革命と宗教的セクト運動」という研究テーマを掲げる私にとって、イギリスは史料の宝庫、いわば「約束の地」ともいふべきところなのでしょうが、逆に史料の豊かさに圧倒され、いまにも史料の海で溺死しはまいかと恐れている次第です。

プロテスタント・メインライン諸教会の母体であるイギリス非国教主義の文書館には、マンチェスタの紡績工場の経営に成功し、自らも敬虔なキリスト者であったジョン・ライランド寄贈なるジョン・ライランズ・ライブラリ（現在マンチェスタ大学図書館が管理）、ロンドンにあるウィリアム博士記念ライブラリなどがあります。私はオックスフォード大学のリージェンツパーク・コレッジの客員研究員として、コレッジが所蔵するアンガス・ライブラリの文献を主に利用しています。このライブラリには、バプテスト派関係の史料が収められており、家への持ち帰りこそ禁じられていますが、いつでも自由に読むことができます。それから、大学図書館として有名なボウドリアン図書館（この図書館が購入する日本関係の文献はなぜか創価学会が寄贈しているとのこと）を利用したり、さらに事足りないときには、大英博物館のブ

リテイッシュ・ライブラリやパブリック・レコード・オフィスに足をのぼしたりしています。

これらの図書館を利用していえることは、総じて専門職のライブラリアンが親切なことです。関連文献はもちろんのこと、手書き文献の解読が難解な場合、その読み方まで教えてくれます。ただ、私にとっての問題は、文献をコピーして持ち帰ることに逡巡せざるをえないことです。第二次文献については、イギリスは著作権保護の確立した国であり（ボウドリアン図書館では、冊子まるごとのコピーは歓迎されません）、また古い史料もその保存状態からしてコピーには相応しくないのです。そのような訳で、私の史料の海、漂流の旅は当分続きそうです。

（おおにし はるき

所員、経済学部助教授）